

福祉系 対人援助職養成の 現場から^④

西川 友理

「あ、そっか…

今月マガジンの原稿締め切りだ」

と、気付いたのは5月2日、団編集長からの「締め切りのお知らせ」メールを確認した時でした。

新型コロナウイルス（Covid-19）のおかげで、日々、イレギュラーなことが多過ぎて、ずいぶん振り回されている状態です。「このご時世に、このマガジンは、コロナの影響を全く受けずに通常営業できるシステムやん。最強やな…！」と思いつつ文面を読んでいると、メールの最後に「まったくコロナ禍の影響を受けることなく、11年目に突入します。」と書いてあって吹き出してしまいました。

今回はコロナの事を書く方が多そうだな、と思うとそれ以外の事を書きたくなるアマノジャク。しかし、このマガジンは「書いたことがやがて、その時代のその分野の記録になる」という意味もあります。バックナンバーを読んで、あとから気付くことの多さに驚きます。

ならば今回は思いっきりベタに、そして視点をぎゅっと絞って、新型コロナウイルス感染拡大防止に伴う養成校の一教員としての混乱を書こうじゃないですか。きっといつか、見返す時が来るような気がします。

というわけで以下、このところの混乱を、総花的に記します。

どうぞ来年の今頃、笑って読めますよ

うに。

2月中旬 卒業式、入学式どうする問題

「ね、御校ではどうされます？卒業式。」
「うち、やる予定だよ。」
「えっ、やるの？」
「やるの？といわれると、不安になるな…やっぱやめといた方がいいかなあ…。」

「いやいや、やり方次第でしょう」
ある保育士養成校の教員が集まる研修会。参加者全員、マスク着用で、プログラムも短縮版で実施されました。研修の内容はもちろん意味あるものであったのですが、会の前後の雑談は、どの養成校も情報交換に必死。この時期は、さしあたり卒業式をどうするか、という話題で持ち切りでした。

「学長のあいさつを ZOOM を使って小部屋で放送、卒業生は小部屋に分かれて聞くという案が出ててね…」
「えーっ、そこまでやる？」
と、まだ笑いながら話していました。

このころ、半年かけてじっくり企画してきたある全国大会について、開催数日前に延期を決定。なぜか私は今年に限って、2月から3月にかけて、5つもの企画委員や運営委員や実行委員会を掛け持ちしており、それらすべてが延期・中止となりました。それはもちろんショックでしたが、あまり落ち込んでいる時間ありませんでした。というのは、最終的に延期や中止と一言で書いてしまい

ますが、そこにいたるまでの話し合いと逡巡と説得と折衝と…自分の頭で考え、思い切りよく判断することを、いつも以上に行った日々でした。何を中止にして、何を延期にして、何をオンラインにするか。返金はするのか、しないのか。関係者への連絡につぐ連絡、それでもおこる連絡ミス。正直、大変疲れましたが、漠然と、当たり前と考え、感じていたことをしっかり考えるチャンスになりました。

さらにはその連絡調整の中で、新型コロナウイルスの情報共有をするシステムが2つ生まれました。

2月下旬 実習をどうする問題

とある地方の保育者養成校に努める友人から電話がかかってきました。

「実習先の自治体から、来月からの実習を全面中止にしてほしい、という連絡があった！」との悲鳴。

そして各々の学校の情報交換をします。本学は、ちょうど、2月29日で実習が終了予定でした。どの実習先も、とりあえず2月中なら実習を終わらせてくれそうな状態。その次の実習は6月を予定していました。

電話を切って、そうか、もしかしたら6月の実習は出来ないかもしれないな、そうなった場合どうしようかな、そういうことも考えなきゃいけないな、と思っていた矢先のことです。

もうすぐ実習を終える学生から微熱、体調不良との連絡。緊張が走ります。

通常ならば「病院に行って、感染性のものかどうかを診断していただきなさい、診断書を書いてもらってね」と伝えるのですが、果たしてそれでいいのでしょうか。そもそもまず、病院に行っていないのでしょうか。学生本人、学生の保護者、実習先交えて、今後の対応を検討しました。

その結果 37 度 5 分以下の発熱であったため、解熱後、1 週間自宅待機で、実習を再開。何とか無事に実習を終えることが出来ました。

3 月上旬

厚労省から、実習に関する通知が出る

非常勤先の社会福祉士の実習先である高齢者施設に巡回指導訪問。

施設の入り口では検温、体温を記録、記名。手指の洗浄、殺菌、消毒。

同行していた養成校の事務担当の方に「これから実習どうなるんでしょうね」と伺うと、2 月 28 日付で「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」という実習に関する通知が、厚労省から出ている、とのこと。

帰宅後、慌てて調べてみると、確かに、社会福祉士や介護福祉士の実習についてのガイドライン通知が出ています。保育士実習は？ 幼稚園教諭実習は？ すでに出来上がっていた情報交換コミュニティに疑問を投げると、「今日ちょうど保育士実習についても出ましたよ！」という連絡が。

3 月 2 日付け、厚労省発「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について」がその通知です。これを見ると「…実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えない…」とあります。実習に代わる演習や学内実習とは、どういうものになるのでしょうか。実習にとって代わられるような彩り豊かな経験が、学内で出来るのでしょうか。

同時期、卒業式の中止を決定、卒業生に通知。通知後、書類の手続きなどで、学校にちらほらと卒業生が訪れます。

「卒業式したかったな…。ほら見て、先生。私これ着るつもりだったの。」

皆、試着した羽織袴姿の写真を見せてくれます。そうだね、女の子たちは皆、ちょっと思い切ったおしゃれをしてもいい日だったよね、と胸が痛くなります。衣装レンタル屋さんや、美容院の売り上げの打撃はいかばかりか、と考えます。

3 月中旬

新年度準備に向けて

関西圏のいくつかの養成校と様々に情報交換をする中で、実習にかかわる状況が具体的に見え始めます。2 月～3 月に時期を分散させて実習に行く大学は、2 月実習は可能であったが、3 月は実習ができない、つまり同じ学年で、実習に行けた学生と行けない学生がいる、という状況も生まれているようでした。5 月実習は既に延期という養成校が増えて

きました。いつ頃実習が再開されるかはわかりませんが、少なくともしばらくは中止、延期の方向で話が進んでいます。

気になるのは新年度に2年生になる学生たちです。果たして卒業までにあと3回ある2週間実習をすべてクリアし、資格を取得することが出来るのでしょうか。まだどうすればいいかはわかりませんが、なんとかしてでもその環境を整える必要があります。

入学後に実施される健康診断について、京都府医師会が「安全のために、しばらく健康診断は出来ない」との通知をしてきました。6月に実習に行く準備書類として、健康診断書は必ず必要です。結果が出されるまでの期間を考えると、どんなに遅くとも、5月に入るまでには健康診断をしなければなりません。健康診断書がないと、実習に行くことはできません。一大事です。ほかの養成校はどうしているだろうか…と情報を集めました。すると、大きな大学は「学内の医療センターで実施したから問題なし」、小さい大学でも「3月中の入学前に慌てて実施した」などの答えが。皆さん先見の明がおありで…これはちょっと失敗したな、と、頭を抱えます。

24日、文部科学省から「令和2年度における大学等の授業の開始等について」という通知が出されました。三密を避ける事、遠隔授業の実施方法の検討、入学式などの学事のあり方、留学生への配慮、授業料についての考え方等…。この日、学内では、入学式の中止を決定しました、

4月上旬

遠隔授業、教科書販売、実習

…次々と考えることが。

4月2日ソーシャルワーク教育学校連盟（ソ教連。社会福祉士と）が「6月末までの実習を見合わせる」との声明を出しました。社会福祉士、精神保健福祉士の養成校の先生と電話で話すと「とりあえず、実習はなしにしたけど、だから次にどうする、というのは全く考えられてないんだよね…」とのこと。対人援助職養成の実習がある大学は、どこも皆先が読めずに、右往左往する余地もなく、じっと耐えて待っているような状況です。

4月3日、文部科学省から「令和2年度における教育実習の実施に当たっての留意事項について」という、教育実習に関する通知が出されました。いわく、「秋以降に実施することを検討していただきたい」「時間数や機関については弾力的に対応していただきたい」などなど、はっきりと明言は避けるけれども、なんとなく察してください、というような文章。なるほど、これは頭がいいといふかなんといふか…弾力的な対応ってなんやねん…と妙に感心してしまいました。いずれにせよ、6月に実施予定であった教育実習(幼稚園実習)もこれで全面的に実施出来ない、と判断しました。秋以降の実習スケジュールで、何とか対応が出来ないか、学内で検討し実習先にも相談します。

4月7日 7都市に緊急事態宣言が発

令。とりあえず4月中頃までの休校は決まりました。

様々な保育士養成校から「休講中の課題として、マスク作成を課しました」との報告が。私たちも、学生に「縫って作らなくていいから。折って作るタイプのマスクをさっと作れるようにしておくこと」と指示しました。

「なんか、みんなでマスクを作ってるなんて。防空ずきんか千人針みたいやね…」と同僚の先生がおっしゃいます。そうか、私たち被災しているのだな、と気付きます。世界中の、新型コロナウイルスの影響を受けている国々の人が、皆一斉に、多かれ少なかれ、今は被災しているのです。

学生たちに、休講中に勉強できる課題を郵送。しかし、コピー代も郵送代もばかになりません。教科書がないと、授業の実施や課題の指定が難しいですが、テキストを手に入れるだけのために、公共交通機関を使わせ、学校に来させるかどうか…。

また、うちの学校でオンライン授業をするなんて、どこまで実現可能でしょうか。しかし今やほとんどの学生がスマホを持っているはず。何とかしようと思ったら、何とかできるのではないだろうか。

その他諸々、うちのような小さな大学だからこそできる事はたくさんあるはずです。

テキストについて、大手の大学は、大きな書店から直接郵送されてくるとのこと。わが校は規模が小さいので、近所の本屋さんが窓口になってくれています。事務職員がそろって

「配送料、かかりすぎるんやったら、学生一人一人の家に、僕たちがテキストを車で持っていきます！」

と言ってくれます。なんとありがたい…。しかし、それで何かあった時には、感染源として疑われる危険もあります。本屋さんと事務が話し合った結果、本屋さんがまとめて郵送し、代引き手数料を負担してくださるとの事。なんとありがたい…。

みんなの協力のおかげで、教育できる環境が徐々に整っていきます。

大手携帯電話会社三社が、学生の教育通信学習支援としてデータ容量を無償でグレードアップすることを相次いで発表しました。オンライン授業を行う方法も本格的に模索し始めました。

4月中旬

方向性が固まり、具体的な動きへ

フェイスブックの「新型コロナ休講で、大学教員は何をすべきかについて知恵と情報を共有するグループ」に加入。この時点でグループメンバーは1万人を超えていました（5月23日現在、メンバーは1万9千人を超えています）。TEAMS、ZOOM、Google Classroom、YouTube、Remo、などなど、皆が試行錯誤しつつ、新たなスキルを磨いていく書き込みを見て、焦ります。

4月16日、緊急事態宣言が、全国へ拡大。ゴールデンウィーク明けまでとのこと。いや、どう考えてもゴールデンウィークには収束しそうにないでしょう。腹をくくって、オンライン授業の準備を進

めまず。勤務先は Google Classroom のシステムを採用することになりました。慣れないシステムを理解し、教えあい、やっと理解してきたころに「このやり方はマズい」と教えられ、「この方法の方がいいよ」とまた一から覚えなおす、その最中にまた問題が指摘される。教員も職員も必死です。一同、思う存分振り回されています。

文部科学省や厚生労働省の通知を受けて行っていた、実習期間の再設定もなんとなく目鼻立ちが付いてきました。どの実習先も、出来るだけ何とか実習をさせてあげたい、と思ってくださっていると感じます。

実習先とのやりとりの中で、実習が滞ると、新入職員の募集に大きく影響が出る、という相談もされます。確かに、実習に行った学生が「まだ就職先決まっていないうちの試験受けない？ って言われちゃいました」とホクホク顔で返ってくるのがよくあります。1~2回の面接試験のみよりも、10日間の実習を過ごして、お互い様子がわかっているほうがいい、ということで、実習は就職に直結する太いルートの一つになっています。このような各園の新規職員採用のための取り組みが例年通りにはいかず、さらには各地の就職フェア、就職説明会も軒並み中止、延期。新年度に向けての人員確保計画が滞っているようです。

「今はまだ様子をうかがうしかないけれど、いずれ何か具体的な取り組みをしていこう」と、一緒に考えます。

4月下旬

学生の負担をどう減らすか問題

4月22日、学生団体Free!による調査で、コロナの影響のため、大学生13人に1人が退学を検討しているという事が判明したとニュースになりました。本人のアルバイト先が自粛中で収入が見込めなかったり、親御さんの仕事に影響が出てしまったり…。

同調査では、大学にある3分の1のサークルが新入生を獲得できていない、あるいは獲得に苦労している、というデータも発表されました。さらには、大学に入ってきた新たな友人は0人、という学生が2割。この数値は2年~4年も含めているので、新入生だけを見てもっと多そうです(クロス集計の結果は出ていません)。実家から離れて、一人暮らしをしている学生が多い大学は、どのように対応しているのでしょうか。

このころ、明治学院大学が、就学支援として、全学生に5万円したとのニュースが出ました。「学費を返したの？」と思って調べてみると、このお金は奨学金積立金から捻出と発表されていました。学費の一部を返却するのではなく、卒業生や父母から集めた寄附を含めたものが財源であるということ。なるほど……。これから後、各地の大学が様々な学生支援策を打ち出していきます。

授業料、データ容量、通信インフラ、学生のメンタルヘルス、生活費。学生の心と体と生活を、どこまで視野に入れて、どのように支援ができるのか、毎日考え、

話し合う日々です。

4月の終わり頃、やっと Google Classroom の操作にも慣れ、授業の計画も立て直し、なんとかまともに授業を作り始められるようになりました。

その矢先、私のパソコンが大クラッシュ、ブルースクリーンから動かない！

「何なのもう、このタイミングでこの仕打ちは……」と半分泣きながら初期化し、必死で復旧作業にかかります。都合2日かけてなんとか復旧。へとへと。

5月初旬

ゴールデンウィーク突入。

オンライン授業準備、いよいよ大詰め

パソコンに向かって、授業動画の作り方を研究する日々。こんなにPC前に張り付いて、切迫した思いで過ごすゴールデンウィークは初めてです。

やがて、気づいたことがあります。

知識を流すだけの授業は、もともと対面授業でも無意味だと思っていたけれど、遠隔授業となると、いよいよ意味がない。それよりも自分で深く調べる事、物事の意味を理解する事、何度もやって習熟する事、文献を読み込んで思考を巡らせること、自分で調べてたどり着く面白さを、きちんと気づくことができる勉強方法を、もっと充実させることが出来るかもしれない。

これはちょっと面白い授業が出来そうだ。と思い始めます。この状況だからできる学びを考えよう、という欲が出てきます。

5月2日、大学生協による全国の大学生への調査結果が発表されました。4月20日～30日の調査の結果、アルバイト収入が減少した学生は4割、何らかの経済的な不安を訴える学生は6割。確実に何らかの支援が必要だと感じます。

5月4日、フレッツ光、docomo、ソフトバンク等々で通信障害が発生。これが授業中に起こったら、と考えると、やはりオンタイムの授業というのはなかなかハードルが高そうです。動画配信の方が、トラブルは少なそう。でも、リアルタイムのやり取りが出来るオンタイム授業はやはり魅力的です。

5月8日、来週から始まるオンライン授業に向けて、オンラインオリエンテーションを実施…のはずが、ちょっとしたトラブルのため、8日に実施することが難しいことが7日に判明。翌9日に急遽日時を変更、学生それぞれに手分けして連絡します。

5月9日、画面上とはいえ、久々に顔を見る学生たちです。基本的な今後のスケジュールと、オンライン授業のルールをつたえます。2年生は久々に顔が見られて嬉しそう。カメラやマイクをONにすることにそれほど抵抗がありません。「お、〇〇や、元気?!」「〇〇ちゃん〜!」というやりとりも見られます。

1年生はなかなかカメラをONにしません。自分の顔が画面に出るのが恥ずかしい様子。

「皆さんも、私たち教職員も、全員オンライン授業はド素人です。教えあいながら、頑張っって乗り切りましょう!」

と伝え、オンラインオリエンテーションを終了。学生全員がオンラインの部屋から退出したことを確認し、ふーっとため息をつきます。よし、オンラインで全員の顔を見ることが出来た。なんとかなりそうです。

5月中旬 オンライン授業スタート。

5月11日、いよいよオンライン授業が開始。

1日目、2日目はシステムに乗り切れない学生からの「〇〇ができません」「どうすればいいですか」という質問や注文が毎時間ごとに入りました。学生の親御さんからも何度か連絡が入ります。教職員もどうすれば学生全員をシステムに乗せられるか、必死に対応を考え、試行します。

しかし、一週間もたたないうちに、学生たちは「システムに乗れないままで別の方法でフォローする道を自分で考え、教員に申告する」という方向にシフトしました。その週の最後には「なんとかしてください」「どうしたらいいですか」ではなく「〇〇〇のようにしましたが、××でした。▽▽しておきましたがよろしいですか。」という聞き方をする学生が増えました。何かが出来ない環境にいる友達を、自然にクラス内メンバーが助けます。助けられ方も助け方も、上手になっていきます。これと同時進行で、教員もどんどん経験を積んでいきます。

オンタイムの生中継の形式の物(オンライン)、あらかじめ動画を撮影し、そ

れを視聴する形式の物(オンデマンド)、いくつかの指示が出され、その部分を自習する形式の物(課題指定)など、それぞれの授業で先生方が工夫されます。どの授業形式にも一長一短があります。授業内容に合わせて、適宜使い分けます。

またどのような授業形式でも、例年に比して質問が出やすいという事に気づきました。皆の前で声を出したり、手を挙げたりといったことがなく、文章で質問するために(オンラインでも基本的にマイクは使わず、チャット機能というLINEのやり取りのような方法で発言することが出来ます)、質問する事へのハードルが低いのではないかと考えられます。対面授業のように、空気感の共有や表情の確認が出来ないというつらさはありませんが、情報のやり取りの双方向性は、技術的な理由だけでなく、進んでいることを実感します。

5月下旬 出口が見えてきたからこそ、 考えなければいけないこと

5月14日、緊急事態宣言が地域により緩和。ただし、職場のある所はまだ緊急事態宣言が続いています。しかし、なんとなく出口が見えてきた感じです。

対面授業の再開を考えます。教室の配置はどうするか、遠方の学生の通学への配慮をどうするか、ピアノの個人レッスン室の換気はどうするか(窓を開けると音が外に漏れるのです)、駅からのスクールバス内の三密をどう回避するか…。

とりいそぎ、学生の通学方法や対面授

業開始に際しての心配事についてアンケートをとります。これと同時に、共有スペースの椅子机の配置の整備を検討、事務局カウンターにある筆記用具はすべて撤去(学生は絶対自分のペンを持っているはずですから)、全教員分のフェイスシールドの購入手続き…と、ハード面の整備を整えていきます。

5月21日 京都。大阪、兵庫の緊急事態宣言解除。さあ、これから、どう動くかです。

5月24日 これまでの振り返りと、 これからのこと。

ここ数か月、を振り返って思う事。

まず、私達はよく話をしました。相談をしあいました。何度も何度も会議をし、トライ&エラーを繰り返しては、その結果についても何度も話しました。

それから、遠隔授業についての知識がシンプルに増えました。何年分かのFD(ファカルティディベロップメント、教員の能力向上のための取り組み)を、ここ数か月で一気に実施した感じですか。

これは単純にIT知識が増えたという意味だけでなく、こんな時でも変わらない学びを、むしろこんな時だからこそできる学び方を考えることで、深い理解と面白さにいたる授業の在り方のヒントを日々、見つけられているということです。

そして、顔を見る事や実際に同じ空間を共有する事の意味を強く感じるようになりました。

今後何がどう動いていくのか、まだ先は見えません。おそらく、第二波というものもあるのでしょう。うろたえるなどいわれても、否が応でも翻弄されると思います。

こんな情勢下で、対人援助職がどんな役割をはたしていくのか。卒業生たちは皆、保育所、幼稚園、福祉施設と、三密この上ない現場で働いています。

世界中が一緒に何かを学んだ経験になりそうな、でも、喉元過ぎればやはり元に戻ってしまいそうな(いや、元に戻ってほしい部分もあるけれど)、それでも「みんなと一緒にこの苦難を経験した」という事が、何か今後の生活の、何かはじまるタネになるのではないかと考えています。